

# 矢土勝之（錦山）と伊藤博文をめぐって

原 田 敬 一

## はじめに

二〇一〇年頃のことだったと記憶する。佐久間貴士大阪樟蔭女子大学教授（当時）から、松阪市に伊藤博文に係のある史料群があるので、調査してほしいと相談があった。翌年一月、高田祐介さん（京都産業大学史編纂室）と西山紘二さん（佛教大学大学院博士後期課程、現在福岡県添田町教育委員会）とともに、松阪市民俗資料館を訪問し、その後矢土家も訪問し、若干の調査と文書整理を行った。ただ私の家族の事情があつて、その後詳細な調査と整理を行えないまま、時間が経過している。短い調査に過ぎないが、それらからも興味深い史料が発見でき、まとめることで学界へ提供したい。なお今後の再調査も計画中である。

矢土錦山については、それまで知識を持たなかったのだが、伊藤博文の直話として次のような記述がある。

森 槐南と矢土錦山を語る

槐南と錦山とを較ぶれば、槐南は遅作にしてよく句を煉り、錦山は速成にして所謂当意即妙である。書体は錦山遙かに精妙、書家として一家をなしてゐる。

これは伊藤博文述・小松緑編『伊藤公直話』<sup>1</sup>に掲載されているもので、小松緑の「はしがき」には、「末松謙

澄・大岡硯海・大橋乙羽・古谷久綱・坪谷水哉諸氏及び私どもが、親しく筆記して公の検閲を経たものである」とあり、娘婿の末松謙澄、政友会創立以来の政治家大岡育造、硯友社の小説家で、出版社博文館支配人となった大橋乙羽、国民新聞記者から伊藤博文の秘書官（一九〇〇～一九一〇）になった古谷久綱、博文館の雑誌『太陽』の編集長であった坪谷善四郎、外交官出身の小松緑という顔ぶれは、伊藤博文から直接話を聞く機会が多かった人物たちとして認められる。そうした聞き取りの中に、森槐南つまり森泰二郎（一八六三～一九一一）と矢土錦山つまり矢土勝之（一八五一～一九二〇）の二人を並べて伊藤博文が批評している文章である。二人を並べたのは理由がある。二人は伊藤博文の総理大臣秘書官室に勤務し、近侍していたからである。

二人には共通した能力もある。漢詩人として知られた人々だった。森のほうが矢土より一回り、一二歳若いが、泰二郎の父、春涛（浩甫、一八一九～一八八九）が一八七〇年代から著名な漢詩人であったので、泰二郎も若年から漢詩人としてたっていた。泰二郎は四八歳で亡くなるが、東京の漢詩界でたえず盟主と仰がれていた。伊藤の批評は、二人の能力に差があると言っているわけではなく、作詩の流儀が、ゆっくり句を煉る森泰二郎に対して、矢土はすらすらと作詩し、しかもその内容が当意即妙であるということを指摘しているのである。書家としての矢土を高く評価している点も重要である。森泰二郎は、そういう経歴から多くの知人や弟子がいたが、早稲田大学教授の市島謙吉は、「全体槐南は書があまり上手で無かった」（市島『春城随筆』早稲田大学出版部、一九二六年一月）と回想しているように、二人の書には差があったようである。

ただこの「直話」には少し疑問がある。『伊藤公直話』は五部構成で、「第一編 人物談」には一九種の「直話」が編集された。大久保利通には一五頁をさき、木戸孝允には一二頁をあてるなど伊藤の交友関係を如実に表す頁構成になっているのは当然と言えば当然。全一九種の最後に登場するのが先の「森槐南と矢土錦山を語る」だった。大久保や木戸、西郷隆盛や高杉晋作など近代政治家としての伊藤博文をいわばうみだした人々から順に並べ、それ

らの語りが密であるのは当たり前であったが、常に傍にいた側近である槐南と錦山についての語りは、先に挙げた文章が総てである。原文で二行、字数にしてわずか六九字（句読点含む）。あまりに少ない。彼らが江湖にも知られた漢詩人であったという記述さえもない。何かがここには隠されているのではないか。そうした疑問も持った。矢土勝之について単著の研究論文等も存在しない。そのため本稿は、矢土勝之についての基礎的史料も含め構成する。

## 一 矢土勝之の履歴について

松阪市民俗資料館が作成した「矢土錦山略年表」によれば、勝之は、嘉永二（一八四八）年伊勢国度会郡田丸新田の矢土源助と岸の三男として生まれた。長男は源平、次男は源八だから、幼名は「源」がつくだろうが、不明なので以下は「勝之」で表す。

三重大学教授浦城晋一氏が作成された「矢土家系図」（手書き）によれば、勝之の姉、長女の安（やす）は、東畑平三郎に嫁いだ。安の生んだ長男吉之助の長男が東畑精一（東京大学教授）である。勝之の妹、安の三女まつは、浦城家に嫁している。以後、矢土家、東畑家、浦城家の三家は、婚姻や養子縁組などで複合的な関係を作っていく。錦山の影響なのか、学者や医者が輩出する家系となった。

浦城晋一氏は「阿波曾の文学・矢土錦山勝之（前）——阿波曾隠棲迄——」（手稿）もまとめられておられるので、それを参考にしつつ、矢土勝之の幼少期をまとめていく。浦城氏はおそらく家伝や口伝を採集し、本稿をまとめたかと推測される。

勝之は幼時、新田耕読廬とも呼ばれた田丸郷学所で、藤川三溪に学んだ。文久元（一八六一）年、一三歳にして父を失い、伊勢国山田の暦屋西島氏に預けられ、働くことになった。山田には、伊勢神宮の祀官である松田雪柯

（元修、一八二三―一八八一）の私塾・三余学舎があり、勝之は入門し「儒詩書」を学んだという。雪柯は、清の考証学者である段玉裁の六朝書道に関心を持ち、研究に励み、一八八〇年には「段氏述筆法」を自費出版していたが、一八八一年に亡くなる（五八才）。二年後、段玉裁著・松田元修書『段氏述筆法』が鳳文館から出版されるが、其の編者は矢土勝之だったので、雪柯と深い縁があったのは確かである。なお跋文は巖谷一六（小波の父）である。浦城氏の「阿波曾の文学」によれば、「慶応二年 津藩有造館に紀藩留学生として入る」とあるが、津藩の藩校に武士身分以外が入門できる規定があったのかもしれない。伊勢国松阪は紀州藩の飛び地だったので、「紀藩留学生」といういわば外ものとしての扱いだったようだ。この文章の続きには「師、後の督学（大儒）土井馨牙。ここでは史と詩。学生ながら師の仕事―斎藤拙堂（前任者）以来の課題であった資治通鑑（司馬光）注義など―も手伝い、また蘇軾―号東坡―などを研究する。学生から諸官となる。」とあり、勝之は、学問にいそしみ、努力を続けたようだ。慶応二（一八六六）年から一八七一年藩校有造館の廃止までの五年間に、教師の地位にまで昇ったとされる。

幕末を有造館で過ごした勝之は、一八七二（明治五）年太政官への出仕を命ぜられる。やはり「阿波曾の文学」によれば、

太政官政府の宮廷系の吏に巖谷脩、紀藩の詩人家里松涛を介して亀井改堂と交わりあり、改堂が脩に、脩が岩倉公に、勝之をすいせんした、

との記述があるが、典拠史料の記載はない。有造館に入るまで、亀井改堂の門で学んでいたようで、その推薦が得られたとする。この時岩倉具視との縁も出来たのだろう。

最初の勤務は、一八七二年からの太政官修史局の属（判任官）という下級官吏から始まった。その後は辞令書が残っている。年表風に記述すれば、次のようになる。

一八七四（明治 七）年 五月 二日 （現任）一二等出仕 （↑休暇依願書の記述）

一八七六（明治 九）年 一月 一六日 任賞勲事務局三級秘書 （現任）一一等出仕

一八八八（明治二一）年 六月 一日 任帝室制度取調局書記 （現任）賞勲局属

一八九三（明治二六）年 一月 八日 任内閣總理大臣秘書官室勤務（現任）内閣属

一八九六（明治二九）年 一〇月 二四日 辞任（別紙辞令書は不明）

前掲「矢土錦山略年表」によれば、この年に辞職し、松阪に帰り、隠棲生活に入った。

一九〇四（明治三七）年 一月 九日 任雇 但總裁官邸勤務・月手当八〇円

矢土の官歴が始まるのは太政官修史局で、その一等修史官は巖谷修であり、川田剛もあり、彼らとの交流があったと思われる。

東京の住所はほとんど不明だが、一八八三年九月に出版された前掲『段氏述筆法』の奥付には、

編者 三重県平民 矢土勝之

東京府麹町区平川町三丁目十四番地寄留

とあるので、賞勲局勤務時代の住所と思われる。

松坂に帰っても漢詩の世界と切り離されることがなかったが、第五回総選挙に三重県第四区から出馬し（自由党）、衆議院議員となり、一期務めた。第一次世界大戦後の一九二〇（大正九）年 一月 二八日亡くなった。享年七二歳。

没後に刊行された三重県人名録のいくつかにも矢土錦山の項が設けられている。どの程度の評価を知るためにも、それぞれ全文引用したい。

詩書家 錦山 矢土勝之 飯南郡射和村大字阿波曾一三／嘉永四年三月七日生

矢土勝之（錦山）と伊藤博文をめぐって

矢土勝之、錦山と号す。又澹園の号あり。元農に出で而も尚文、書画を以て聞ゆ。故伊藤公の滄浪閣に起臥して詩文の交を深ふす。儒学の造詣深く、忠孝を主義とし、佛教を信じ、読書を娯樂と為す。衆議院議員に当選したる事あるも是れ君の本意にはあらざる可し。伊藤公歿後常に射和に居して文筆を事とす。日々訪客門に集まりて揮毫を乞ひ応接に暇あらず。醉余筆を揮つて詩を作り、書を記し、画を描く、其所に自らの神韻を生ず。三重県詩壇の重鎮たり。而も久しく県地に居せず、門下自から少きを遺憾とす。県下には阪口雨邨、淇園眠石等数人のみ。服部担風が弥富に居して三県に吟社を有すると大ひに趣きを殊にす。然れど錦山の価値は之が爲めに損せず、漢詩壇後進の爲め遺憾と為すのみ。

これは一九一六年一月、三重県文社刊行の『大正三重雅人史』の記事（八六頁）。同書は、「我が三重県文芸雅道界裡の人士を周知せしめんが爲めに編するもの」（「例言」）で、松本青外が三重県文芸界の状況をまとめた「上編 本史」と「下編 伝記」に分かれている。この記事は後者に掲載され、伝記編には一九六名について詳しい伝記情報をまとめている。三重県内に詩社を持たなかったために弟子は少ないが、漢詩も書も高く評価され、揮毫を乞いに来訪する人が多いと、その人気ぶりを説明している。

錦山に続いて嗣子の三郎も掲載されている。

和歌家／南画家 矢土三郎 飯南郡射和村大字阿波曾一三／明治二十年五月四日生

矢土三郎は、矢土錦山の嗣子にして医師たり。歌画に堪能なり。明治二十七年学習院に入学、同四十年錦城中学卒業、同四十年大阪府立高等医学校予科入学、大正二年同上本科卒業、直ちに開業して今日に至る。尚漢学を三島中洲藤澤南岳に学び、和歌を中西弘繩に学び、画を田部江東に従ふ。又茶道に深し、其書も没す可らず。将来和歌と南画を余技として雅人界に雄飛すべしと称されつゝあり。

錦山の半分くらいの原稿量だが、和歌と南画に優れた文人として高く評価されている。

もう一つの人名録は、一九三一年七月、三重県津市の玄玄社刊行の『三重先賢伝』である。市村慶堂三重県知事が題字を寄せ、近藤克堂神宮皇学館教授が序文を書いたこの書は、元三重県立津中学の教員であつた浅野松洞が著わしたものだ。浅野松洞はやはり漢詩文に長じ、「深く此の地の文学の萎靡不振を慨き」（克堂の「序」）江戸時代以来の「先賢」五三四名の評伝をまとめたもの。錦山は次のように書かれている。<sup>(2)</sup>

#### 矢土錦山

名は勝之錦山は其の号なり。勢洲射和阿波曾の人。元田丸の豪商矢土源八の弟なり。年十三にして山田曆製造業西島某の養子となり、傍ら藤川三溪・松田元修に就きて漢学を学ひしか、日夜読書に耽りて生業を顧みず。為めに養母の厭ふところとなり、十七歳の時遂に復帰す。是歳、贅を土井贅牙に執り、研鑽五年、巍然として頭角を見はす。二十二歳、東京に遊ぶ。三条実美一見其の才を愛し、巖谷一六に師事せしむ。後岩倉具視に推され、太政官二等出仕、尋いて賞勲局官制の発布と共に賞勲局に転し、時の總裁伊藤博文の知遇を受く。爾来数十年森槐南と共に、詩侶として常に博文に陪従す。明治二十八年日清の戦役畢り、和議將に成らんとするや、屢々博文の密旨を帯ひて潜かに天津に至り、樽俎の間に周旋し、折衝其の宜しきを得たり。伊藤内閣の組織せらるゝや選はれて衆議院議員と為る。尋いて韓の我が保護国となり、新に統監府の設置せらるゝや、博文は其の統監と為り、出て、韓帝に奉仕し、錦山亦博文に随ひて彼の地に至り、顧問として献策するところ多し。後博文の難に哈爾濱に遭ふや、故山澹園に帰臥す。爾来其の学徳を慕ひ、揮毫を乞ふ者日々門に接す。又東京各詩社の顧問評者及京都漢文学会の講師として、鏗鏘尚ほ壯者を凌ぐものありしか。大正九年十一月偶々宇治山田市に遊び遽に病を得て遂に起たす。二十八日を以て歿す。年七十二。阿波曾に葬る。著書に錦山遺稿あり。錦山蔵書頗る多く、門人故旧等相謀りて其の旧邸に錦山文庫を建設するの議あり。

嗣子三郎明治二十年五月八日を以て生る。夙に医学を修め、田丸町に医院を設けて診療に従ふ。頗る令名あり。



嘗て漢学を藤澤南岳・三島中洲に学び、傍ら和歌画事茶道に精通す。(二七六―七頁)

漢詩人としての高い評価は『大正三重雅人史』と同じだが、三重県に帰って逼塞したのではなく、揮毫に応えるほかに東京にまだ多数活動していた漢詩結社の顧問や評者、京都にあった京都漢文学会の講師となるなど、活発な活動を続けていたのが注目される。東京で役人として勤務していた事情については、豊富な情報がつまっている。箇条書きにしてみよう。

- ① 一二歳の時、「三条実美一見其の才を愛し、巖谷一六に師事せしむ。」
  - ② 「後岩倉具視に推され、太政官二等出仕」
  - ③ 「尋いて賞勲局官制の発布と共に賞勲局に転し、時の総裁伊藤博文の知遇を受く。」
  - ④ 「爾来数十年森槐南と共に、詩侶として常に博文に陪従す」
  - ⑤ 「明治二十八年日清の戦役畢り、和議將に成らんとするや、屢々博文の密旨を帯ひて潜かに天津に至り、樽俎の間に周旋し、折衝其の宜しきを得たり。」
  - ⑥ 「伊藤内閣の組織せらるゝや選はれて衆議院議員と為る」
  - ⑦ 「尋いて韓の我が保護国となり、新に統監府の設置せらるゝや、博文は其の統監と為り、出て、韓帝に奉仕し、錦山亦博文に随ひて彼の地に至り、顧問として献策するところ多し」
  - ⑧ 「後博文の難に哈爾濱に遭ふや、故山澹園に帰臥す」
- 津で養つた漢詩文の才能を三条実美が認め、巖谷一六に師事させた。一六は、巖谷修の号であり、滋賀県士族で、維新政府の官吏となり、一八七六年には太政官権大史(太政官官吏のうち第二等官、大史は土方久元)<sup>(3)</sup>になり、その後官制改正により翌年には太政官大書記官(第一等官で、この時土方久元ら一三名いた)<sup>(4)</sup>。次いで修史館に移り、一等編修官(四名いて、長松幹、重野安繹、川田剛)となる。その後、元老院議員、貴族院議員と経歴を重ねた。



一六は漢詩人として知られていたもので、三条が矢土にさらに研鑽を積むことを求めたのだろう。

錦山が一九二〇（大正九）年一月に没したのち、一九二六年八月「澹園小錦山山房」編輯により活版印刷・和装本の『錦山遺稿』上下二巻本が刊行された。戦前の帝国図書館には入れられなかったようだが、三重県立図書館が所蔵している。また二〇一六年三月、錦山の曾孫勝之氏により『『錦山遺稿』目次及び初句索引―附・影印―』が刊行された。編者杉村邦彦京都教育大学名誉教授による「編輯に当たって」と初句索引、『錦山遺稿』全二巻の影印が総て収まったA4判一〇四頁のものである。これにより矢土錦山の漢詩・漢文の評価がいつそう進むものと期待される。

## 二 総理大臣秘書官という位置

さて矢土勝之の履歴に、内閣属、総理大臣秘書官室勤務や首相秘書官という文字が見えていた。この「総理大臣秘書官」という位置をどのようなものと考えてべきか、が本章の課題である。

薩長藩閥の政治的分析は史料発掘もあつて急速に進み、史料の多く残っている有力者のグルーピングや親密度・重要度などかなり明確になってきた。例えばその解明に大きく貢献してきた佐々木隆氏は『伊藤博文の情報戦略―藩閥政治家たちの攻防』で、伊藤博文の幕僚形成史をまとめ、一八九三年から一八九八年の変化を次頁の図1・2のように示している。<sup>(5)</sup>

佐々木氏の分析によれば、伊藤博文が首相であつた一八八七年春には、首相秘書官の伊東巳代治と金子堅太郎、内務省県治局長の末松謙澄、参事院議官の井上毅という、いわゆる「伊藤の四天王」が揃っていたとする。ここに引用した一八九三年春の図では、「四天王」がすでに閣僚や長官・書記官長など親任官・勅任官レベルに達しているのに対し、第二世代幕僚が各省の課長クラス（奏任官）で登場している。ここで挙げられた首相秘書官は鮫島武

図1 明治26年春の伊藤派

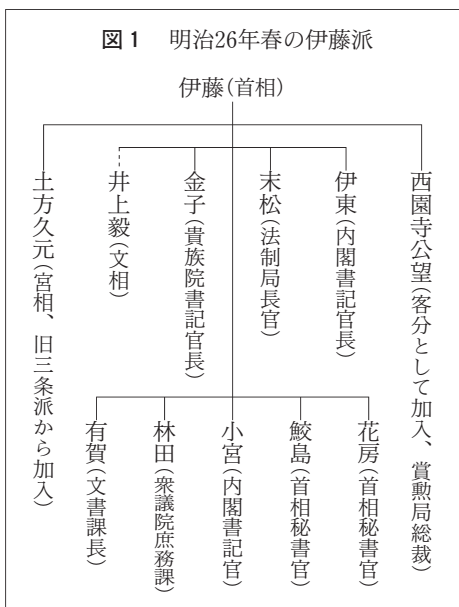
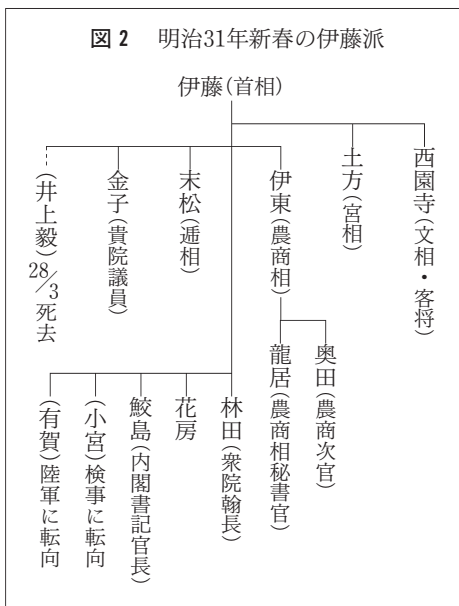


図2 明治31年新春の伊藤派



之助（一八四八年生まれ。一八九三年には四五歳）、花房直三郎（一八五七年生まれ。同じく三六歳）の二人となつてゐる。表では内閣の文書課長となつてゐるが、一八九二年には有賀長雄（一八六〇年生まれ。同じく三三歳）も加わり、秘書官は三名となつてゐた。

官吏の人事異動を示す史料である『改正官員録』は、さまざまな出版社から随時刊行されていたが、一八七七年から九五年までは博公書院（大橋新太郎の経営）による民間出版物として継続していた。一八八六年からは内閣官報局により『職員録』が刊行されるが、掲載様式はほぼ同じなので、『職員録』が発行されることで、民間出版物の『改正官員録』が圧迫され、一八九六年からは完全に『職員録』一本になるのだらう。どちらも中央政府の名簿を「甲」、地方政府の名簿を「乙」として二冊発行している。博公書院の発行する一八八〇年代の『改正官員録』

は毎月改定・刊行されている。『職員録』一八九二（明治二五）年版の二カ月分の「内閣」総理大臣秘書官の部を比較してみる。

（1）一八九二年八月刊行

内閣総理大臣秘書官

奏任二級俸五分ノ一

大蔵大臣秘書官 正六位ノ勲六等 谷謹一郎 大分 麴町区永田町二丁目十四番地

奏任六級 兼内閣書記官

同 正六位 道家 齊 岡山 麴町区一番町二十七番地

秘書官室

属一級 勲八等 寺崎 遜 東京

二級 高嶋張輔 山口

八級 栗山東吾 東京

（2）同年二月刊行

内閣総理大臣

秘書官 奏任四級 從六位 有賀長雄 大阪 麴町区永田町一丁目二番地

同 奏任五級 從六位 花房直三郎 岡山 築地三丁目四番地

秘書官室

属一級 龍居頼三

四級 森泰二郎

(1)と(2)の間に何があつたかというところ、内閣の交代があつた。①は松方正義首相で、②は伊藤博文首相である。一八九二年七月三〇日松方正首相が辞表を提出し、八月八日伊藤博文が内閣を組織した(第二次伊藤内閣、いわゆる元勲内閣)。伊藤の組閣直後、次のような伺いが出されていた。

明治廿五年八月十二日

書記官長(伊東巳代治の花押)

議長(花押)

枢密院属 龍居頼三

全 森泰二郎

右内閣ヨリノ照会ニ応シ直ニ出頭ヲ命シ可然哉

枢密院議長は同年八月八日に伊藤博文から大木喬任に代わっている。花押も大木のものである。どうも内閣秘書官もその下の属も、首相と共に交替していくのが普通であつたようである。松方内閣の秘書官室属であつた寺崎・高嶋・栗山は、代わつて枢密院属に転じている。

(欄外) 明治廿五年八月十三日施行済

明治廿五年八月十二日

書記官(印)

枢密院議長(大木喬任の花押) 書記官長(伊東巳代治の花押)

内閣属 寺崎遜

全 高嶋張輔

全 栗山東吾

任枢密院属

給一級俸

寺崎遜

給二級俸

高嶋張輔

給八級俸

栗山東吾

転任だったが、俸給は上がらず、同等だった。

四年後の一八九六（明治二九）年八月二八日伊藤博文が辞表を提出し、九月一八日松方正義が首相となる（第二次松方内閣）。その時の『職員録（甲）』（一八九六年一月一日現在）。

（3）内閣総理大臣秘書官

六等（兼） 大蔵省参事官 佃一予

六等六級正七 佐協安文 麴、永田二、一四、官舎

六等六級 久保 勇 芝、三田綱、二

属

月七五 並木時習 同 古川 昂

やはり推測通り、秘書官だけでなく、属も交替している。前内閣や前首相の秘密とともに官僚は運命を共にするようである。

伊藤首相時代の（2）と松方首相時代の（3）との間には、秘書官や属の選び方に共通点や違いはないのだろうか。秘書官に首相の気心の知れた人物を充てているというのは当然で、（1）の谷は大蔵大臣秘書官として松方に近侍し、松方が首相に就任すると首相秘書官に転じたわけだし、（2）の有賀・花房も伊藤に近侍していたから首相秘書官になったことになる。では判任官である属はどうだろうか。総務や経理の事務にもあたる属クラスは、実務に長けることが必要だから継続勤務を命じられるかというところではない。では秘密の保持という意味のみの交代だろうか。

(1) の寺崎遜は、工部省電信局技手から神奈川県外事課に転じ、さらに首相書記官室に転じている。日本語のモールス信号を発明した人物として知られているが、電信などの技術を買われたのだろうか。高嶋張輔（一八四六～一九二七）は九峰の号を持つ漢詩人である。森槐南と同席の漢詩作成もある。栗山東吾は慶應義塾の卒業生のようだが、詳細は不明。

(2) の龍居頼三の経歴は不明だが、森泰二郎は先に説明したように、東都の漢詩人の筆頭とも言われた人物。

(3) の並木時習は、学軒の号を持ち、書道本『程夫子四箴』（三思堂、一八八一年一月）や漢文と絵による『塩原紀行』（香雨草堂、一八八九年十二月）の著書を持つ漢詩人だった。古川昂の詳細は不明。

時期的には(2)と(3)の間に入る『職員録 甲』（一八九四年一月一日調査）を次に挙げる。

(4) 総理大臣

秘書官 三級 正六位 花房直三郎 岡山 永田町二番地官舎

同 三級 従六位 鮫島武之助 東京 同町同番地

属 一級 従七位勲八等 矢土勝之 三重

頭本元貞 鳥取 龍居頼三 東京

三級 森泰二郎 東京

六級 山口弘一 東京 八木太一郎

八級 浮洲福雄 福岡 石居武雄 東京

十級 石原鍋蔵 東京

(3) に比較すると、秘書官は二名に変更はないが、属は九名に増員になって、一挙に増加している。一八九三年版『改正官員録』にあった龍居、森も前職は枢密院属だったが、浮洲は枢密院雇からの転属であり、枢密院書記官

長伊東巳代治と伊藤首相の間で、総理大臣秘書官室の強化について協議があったのかもしれない。判任官クラスの属という官吏身分ではあるが、花房や鮫島たちとは異なった首相直属員の意味があったかもしれない。

頭本と龍居は、第一次伊藤内閣でも、「内閣」の部に判任官二等と三等として記載されており、次の黒田内閣期には、龍居の名は枢密院属の欄で見ることができる。また伊東巳代治が一八九八年一月農商務大臣に就任すると、龍居は農商務相秘書官に転じた佐々木氏の前掲表にはあるが、『職員録 甲』の一八九八年版が国会図書館では欠本になっているので確認できない。さらにその後満鉄理事にもなっているので、龍居は属から高等官に昇任しているのだろう。

頭本元貞は不明だが、この（４）の時期後に辞職し、植民地朝鮮でのジャーナリストとしての後半生を持つし、山口弘一は法制局属に転じた後、学習院教員になり、最後は一ツ橋高商の教授となった。属の身分からの上昇が目立つ人材群である。また矢土と森は漢詩人としてすでに知られていた人材である。

第一次松方内閣の高島九峰、第二次伊藤内閣の森槐南と矢土錦山、第二次松方内閣の並木学軒と、漢詩人として知られている人材がいずれの内閣にも総理大臣秘書官室の属として抱えられている。

またそれぞれ著名な漢詩人を継続して雇用するのではなく、首相の交代と運命を共にさせているのはなぜだろうか。もしかすると、こうした人々は、総理大臣秘書官室に勤務する以前に、松方や伊藤らと漢詩の世界を楽しんでいて、その延長が組閣した時の人事になっているのではないか。また著名な漢詩人を伺候させることが彼らにとって必要だったのではないか。

「総理大臣秘書官」の肩書を持つ高等官と、「総理大臣秘書室」勤務の属をそれほど区別する必要もないのかも知れないが、官制上「総理大臣秘書官」の肩書を名乗れるのは高等官であった花房や鮫島に限られる。では「秘書官室」勤務の属をどう評価すべきなのか。



「高等官官等俸給令」によれば、内閣や各省の参事官・書記官・事務官・翻訳官・視学官は高等官であり、属はその次の判任官にあたる。内閣書記官・内閣総理大臣秘書官は高等文官年俸二号表によって支給される（一号表は各省の局長）。二号表は、次のようになっている。

一級	二五〇〇円	三級	二〇〇〇円	五級	一六〇〇円	七級	一二〇〇円	九級	九〇〇円
二級	二二〇〇円	四級	一八〇〇円	六級	一四〇〇円	八級	一〇〇〇円	一〇級	八〇〇円

判任官俸給令の別表は次のものである。

一級	六〇円	三級	四五円	五級	三五円	七級	二五円	九級	一五円
二級	五〇円	四級	四〇円	六級	三〇円	八級	二〇円	一〇級	一二円

額からわかるように判任官の場合月額で、高等官は年俸制だった。

これらで（４）のメンバーの年額俸給を計算すると、秘書官の花房・鮫島は一六〇〇円、属の龍居は七二〇円、森は四八〇円になる。高等官か否かでは相当待遇が異なる。

『改正官員録 甲』一八九三年版の賞勲局の欄には書記官二名、属一名が記載され、その筆頭が矢土勝之で、次のようにある。

一級 從七位 矢土勝之 三重

属の出身県を明記するのは調査が行き届いているかどうかであり大きな問題ではない。矢土の場合、年俸換算で七二〇円になる。この段階で森泰二郎とも差があるが、年令差にもよるのだろう。

### 三 新聞報道に見る矢土勝之

一八七二年から一八九六年までほぼ四半世紀の長期に亘って、東京で官吏生活を続けていた矢土勝之は、趣味で

あり仕事でもある漢詩文の作成に携わる結社や雑誌編集に関わっていた。

●研練社 今回東京麹町平河町に同社を設立し巖谷一六、矢土錦山、神波即山の三氏之が主任と為り、川田瓮江、三島中洲、蒲生夏亭、岡本黄石、大沼沈山、森春涛の諸氏評点者と為り、専ら詩文の評点疑義の質問に応ずるよし（『東京朝日新聞』一八八六年八月三二日）

川田や三島など漢詩文世界の大家を評点者に迎え、神波即山（一八三二年生まれ）、巖谷一六（一八三四年生まれ）の五〇代に並んでまだ三〇代の錦山が結社を創設した記事である。

●鷗夢新誌 詩文風流の雑誌にして能く継続するものハ稀なり。然るに菊川竹蹊氏の編輯に係る鷗夢新誌ハ已編を重ねて九十五集に及び、乃ち本集ハ新年初刊として江湖に頒布せられたり。集中収むる所ハ小野湖山、森槐南、永坂石埭、矢土錦山、野口寧斎、本田種竹等当世名家の手に成り、大抵新年の作及び征清問題に関するものにして、中には雄篇大作多く、夫の徒らに風雲月露を弄する間文字と同視すべからざるものあり（麹町区三番町夢吟社発行）

『東京朝日新聞』一八九五年一月三〇日

『鷗夢新誌』は、漢詩の結社である鷗夢吟社の機関誌で、この記事に先立つ一〇年ほど前の一八八六年一月に創刊され、この記事の四年後一八九九年二月まで刊行を続けた。一三年間の刊行中、森槐南だけでなく、錦山も評者や作者として活躍したと思われる。東京大学法政文化センター明治新聞雑誌文庫しか所蔵していないため未見である。

伊藤博文が他行する際に、錦山が随行していた。それを報じている記事が一つある。

●伊藤侯の広島着 電報にも見へし如く伊藤侯ハ征西の駕に従ひし以来久しぶりにて広島に到れり。去三十日午後零時四十二分の汽車にて同地に着するや、第五師団広島県庁広島控訴院其他各官衙の高等官ハ大抵停車場に出迎へ、大島旅団長の如きハ侯に従ふて旅宿長沼方に到れり。侯ハ黒の洋服に二重マントを纏い居れり。随

行ハ詩人錦山及び日高警部と外に一婦人あり。是例の光菊たることハ言はずもがな。侯の一行ハ昼飯を終へて宇品に到り嚴島に渡り、夫より山口に到り、暫時同地に滞在の筈なりと。

『東京朝日新聞』一八九六年二月四日

この年一〇月に矢土勝之は辞職していたはずだが、新聞記者は「詩人錦山」と個人として表現している。

伊藤博文と矢土や森らとの付き合い方についての記事がある。主人公は錦山ではなく槐南である。一九一一年（明治四四）三月七日森泰二郎が亡くなったことを『東京朝日新聞』三月八日付紙面では、一頁八段のうち三段を費やして報じた。東京の漢詩人界のトップが亡くなったので大きな扱いになったのだろう。第一段の見出しは、

●漢詩界の泰斗逝く ▽槐南森文学博士

と大きな活字で示された。東京帝大から文学博士号を贈られていた。この記事のうち、伊藤や錦山との関係を示している部分のみ次に抜粋引用する。○はそれぞれの記事の別を示し、▲は原文の見出しである。

○曩に清国に遊びて錦裏を富まし、帰朝の後浩蕩詩程の著あり。故伊藤博文公の知遇を受けて、其の外遊に従ひ、哈爾濱に於て遭難の際には氏も亦微傷を負ひたり。

○官辺の肩書は宮内大臣秘書官兼図書寮編修官にして帝国文科大学の講師を嘱託せられ数箇年に涉りて爾雅を講じ居たりしが

○▲当代一流の詩人 氏は官人として現に宮内省の図書寮編修官兼宮相秘書官を奉職し居れども、寧ろ其の本領は詩作に在りて、当代第一流の支那学者詩人として其名を知られ、兼ねて詩人森春濤の子、故伊藤公の詩作の恩師として有名なり。

○▲嚴格なる性行 氏は酒に親しめども斗酒詩百篇の狂態をなさず。田中不二麿氏を中心として設立せる剪燭会等に出席しても宴中常に二三首を越へたること無し。（中略）故伊藤公ですら常に先生の尊称を用ゐたるが、

氏が官人として宮内省に入れるは曾て故伊藤公に従ひて制度取調局に奉職したる経験あるが為なり。

○▲其風流と読書 幼少より支那の演劇を好み、自ら補春天伝奇と題する脚本を創作し、紙数僅に数枚為れども能く当時の清国公使何如障氏をして其靈腕に驚嘆せしめたり。(中略) 去三十二年頃伊藤公に従ひて清国に赴きたる時も酒宴の席にて同行の岡式部官横笛を吹き鳴らし、氏は琴を弾じて合奏を為したる事あり。

これらは新聞記者の批評として書かれた部分で、伊藤博文との関係が深いことが特記されている。少なくとも一八九八年ごろと一九〇九年の二回は伊藤に随行している。伊藤の「詩作の恩師」という評価である。またその作品は清国駐日公使何如障の目に留まる機会があったこともわかる。伊藤への随行・伊藤の詩作関与・清国官吏との交流などは同じ「総理大臣秘書官室」に勤務する漢詩人矢土錦山と共通するものと思われる。

これに続く、伊藤博文の女婿である末松謙澄が語ったという記事にも最初に森槐南と矢土錦山が登場するのでその部分を引用する。

#### ●伊藤公と槐南 ▼末松子爵談

槐南氏は故伊藤公に随ふこと二十余年、公が哈爾濱の最期にまで従ひしことは世の知る所の如し、末松氏は公と槐南氏との間柄につきて曰く「槐南が何時頃より伊藤公と知つたか、ソレは今一寸記憶に明かでないが、公が明治廿五年の議會開院中永田町で馬車の衝突から大怪我をした時、大磯の滄浪閣は未だ出来て居らぬ頃なので同地の岩崎の別荘に転地療養をしてゐたが、槐南は此際矢土錦山と一所に公の身边に従つてゐたよ、考へて見ると十九年に公が欧州から歸つたが、その頃から公と知つてゐたかと思ふ、伊藤公の病氣療養中は槐南、錦山、それから僕も加はつて大磯竹枝と云ふ十首の合作をやつた、槐南は伊藤公が彼方此方に遊ばるゝ折り大抵随つてゐた、まあ公の文事的秘書官と云つた風のものであつた、夫で公の詩作を見る許ばかりでなく時々支那の院本の講釈などもした、槐南は支那の詩文をよく究めてゐたので院本を好んで読んでゐた、一体が詩人に似合はず

世才があつて用が足りるので公からは至極重宝がられてゐた、酒を飲むには飲むが錦山のやうに忽ち詩人肌を現して世を罵倒するやうな態を示さない、だから多年公に従ふてゐた間に別段奇抜な逸話なども聞えたことがない、恁こゝろういふ風でずつと伊藤公に従つて来たのだ云々」と語り

一八九二年伊藤が首相の時、大怪我をして大磯に療養していた際、その無聊を慰めるのが漢詩人である森槐南と矢土錦山の仕事であつたと言えるだろう。また「公の詩作を見る許でなく」と伊藤の漢詩を添削していたことも明確に述べている。おそらく錦山も同じだろう。後で論証する。こうした活動を末松は「文事的秘書官」と表現している。これが各内閣の属として雇用された漢詩人に美称として、また役割の実際的な表現としてふさわしいのではないか。

#### 四 矢土勝之の史料―矢土家文書による―

「矢土錦山資料」は膨大なもので、二〇一一年に調査に入り、少し整理したが難航している。その中の一端を報告し、この史料の重要性を確認しておきたい。

没後に作成されたと思われる「錦山文庫所蔵目録」があり、それには五経一五冊や易経本義五冊などの漢籍和本文五五種（補遺四六点を含む）、「中井履軒翁韓退之帰磐谷序」などの書幅・書額九二種、紫檀硯箱など「遺什」一〇七種が記載されている。それらのうち何点が残存しているかは今後の調査を待つしかない。

墨筆・和綴じ本の一冊に、「錦山遺稿続編 文」（表紙）というものがある。頁を開くと、「錦山遺稿続編 文集」と第一行にあり、ついで「目次」と題して、錦山が作した漢詩や漢文の題が集められている。最初の数行を挙げれば次のようになっている。改行しないで／で示す。

巖谷大夫人七十壽序／牧山先生八十八壽序／瀧野箕山翁八十八壽序／岡本黄石翁八十壽宴請帖

送王紫詮帰清国序／送霞山近衛公序／送川田子揚遊米国序

これらがなぜ『錦山遺稿』に収められなかったのかは不明である。

太政官書記官として錦山の同僚であつた巖谷修（巖谷小波の父、一八三四―一九〇五<sup>⑩</sup>）の七〇歳を祝う漢詩が冒頭にある。一九〇四年のものである。

次の「牧山先生」は、佐藤牧山（晋、一八〇一―一九一）のことで、尾張藩藩校明倫堂の督学として知られていた牧山が、晩年東京に出て斯文学会講師となり、老子や漢詩文を講じていた。一八八八年には八八歳の賀が執り行われ、在京の漢詩人たちが集い、賀を寄せたという。その際のものである<sup>⑪</sup>。

瀨野箕山（一八二五―一九一六）は、備後福山藩の藩校誠之館総裁であり、維新以後の著名な漢詩人だった<sup>⑫</sup>。八八歳の壽とは、一九一三年のことである。

岡本黄石（一八一―一八九八）は、彦根藩家老であつた人物で、やはり維新以後は漢詩人として知られていた<sup>⑬</sup>。八〇歳の壽宴は一八九一年のことになる。

王紫詮（王韜、一八二八―一九七）は、清末の改革派思想家で、一八七九年から八二年にかけて来日している。その帰国の際のものである。

近衛霞山（文麈の父、篤麈、一八六三―一八九四）は、弱冠四二歳で亡くなるが、国権主義的な政治家として知られていた。

こうした多彩な人物の機会に触れて詩作したことは、矢土錦山の交友関係の広さを示しているが、同時に明治期の漢詩世界の広さをも示している。清国の公使や改革派が帰国するとなると集まつた人々は漢詩を贈つて歓送する。友人の誰彼が遊学や転勤の際には集い、同じように漢詩を贈り、労う。そういう世界で作られた漢詩を史料として読み込むことは、現代歴史学界ではほとんど試みられないが、もう少し注意を向けてもよい。

またこの中には「作文語林叙」という文章が掲載されている。これは橋村正環が編纂して一八七八年一月に刊行された『作文語林』（金港堂）の序文として作成された漢文である。漢詩を作る際の熟語の音読みと訓読みをイロハ順に並べている。こうした参考書の出版に際して錦山に序文を求めているようで、「詩学初階叙」「華外詩集叙」「養痾詩紀叙<sup>15</sup>」「齊雲詩稿叙」「柳城詩画帖叙」など多数の文を作成している。『三重先賢伝』にあつた帰郷後も、東京の漢詩結社と関係を持っていたことを裏付けている。

問題なのは「別巻第一」と題された墨筆・和綴じ本で、目次を総て挙げてみる。多数なので改行しないで／で改行箇所を示す。

因明入正理論与便序／富岡海莊記／楽山水莊記／随意莊記／時雨亭記／小金原開墾碑／澎湖島従軍死者招魂碑／牧亭翁壽藏碑／堀田氏功德碑／水郡長雄碑陰記／叔兄宇津木東昱碑／贈正四位高杉君碑／東京慈恵院看護婦小倉氏墓銘／故京都府知事中井君墓表／祭贈従二位日野公文／贈正二位大原公家伝／戊辰徴士都築君墓表

以上一七点の漢詩や漢文が集成されているが、それらの題名の下には、

因明入正理論与便序 代 柳原総裁

などと「代」の文字と人名が書かれている。「贈正四位高杉君碑」の下には「代 伊藤公」とある。「代」は代作の意味だろう。誰の代作かわからないものもあるが、これを文字通りに解釈すると、伊藤博文や柳原前光の漢詩代作を錦山が依頼され、それに応えて作詩・作文していたことを表していることになる。以下検討する。

柳原前光（一八五〇〜九四）は、権中納言柳原光愛の子で、明治天皇の生母柳原愛子の兄になる。駐露公使を経て、一八八三年六月二五日から一八九一年九月四日まで賞勲局総裁を務めている。この時期は矢土が賞勲局に勤務していることと重なる。錦山の作文と、柳原の名義で発表されたものが、どのようなものなのか、「別巻第一」から引用し、実際の刊行物（北畠道龍著『因明入正理論与便』一八八五年）と比較してみる。上段が「別巻第一」



の引用で、下段が刊行物からの引用である。句点は適宜補った。

南紀道龍師著因明入正理論与便若干卷  
微余序。予嘗与龍師歷遊泰西諸國。其在  
字國伯林一夕為余說因明之理。當時余徒  
嘆其微妙。已今也得此編。讀之津筏不迷  
稍通立破之旨及其刻成間世受益如余  
者。何限嗚呼印度建国。尤旧泰西所称論  
事矩者既已說之數千年前微妙覆出。其上  
則釈尊大智固不可思議而弥勒以下伝燈  
不滅東漸我邦日久。今又得龍師。其人発  
微現妙。斯学従是遠矣。龍師兼通泰西之  
学善独逸語。則使泰西人士翕然向。此亦  
当非難歟。天上天下正理無二。我不招之  
彼必来焉。若問慈航指鍼則舍此編而何求  
龍師功德於是乎。可謂广大也矣。

紀州道龍師著因明入正理論与便三卷微余序。予嘗与龍師  
歷遊泰西諸國。其在字國伯林一夕為余說目的之理。固折  
殆生来太称其微妙矣。今復說此編。更詳一二四八立破真  
似之旨。而津頭加明所得加稍爽快。何限嗚呼印度建国最  
奢數千年前既有此說。釈尊大智固不可思議哉而弥勒無著  
以下伝燈如綫。遂東漸我邦日亦已久。今又得龍師。其人  
発微現妙。斯学従是遠矣。龍既兼通泰西之学。則使泰西  
人士翕然向。此亦当非難歟。天上天下正理無二。我不招  
之彼必来焉。若問慈航指鍼方則舍此編而何求龍師功力於  
是乎。可謂广大也矣。

明治十有八年六月一日

從三位勲二等伯爵 柳原前光撰并書

(印)

前半に加筆・削除などの加筆が目立つが、全体の趣旨はほぼ同じと言ってよいだろう。柳原が北畠道龍とともにドイツに滞在中、玄奘が漢訳した「因明入正理論」という仏教の論理学書について議論する機会があったなどの逸話を直に聞き、作文したものと説明している。北畠道龍師の口述を筆記した僧侶の西河偏称と長岡洗心が解題のよ

うな文章を同書に加えているが、それは釈迦以来の論理学の伝統があるのにも関わらず、西洋学が入ってきてその論理学に圧倒され、「今ニテハ僧門ト雖トモ之ヲ知ル者天下殆ト五指ヲ屈スルニ足ラス」（二頁）であるため、この論法の実用化を図り、「此ノ分明ヲ佐ケントスル」（三頁）ためという、西洋学に対抗する仏教学という側面を持っていた。こうした仏教者の刊行意図を援助する意味で、旧知の柳原前光が依頼を受け、また彼を錦山が助けたという作文であった。

「別巻第二」という別の一冊には、

万国通史學要序／松石山房印譜自序／松石山房印譜統編自序／隨意莊題詠余集序／監獄學序／笠松宗謙遺稿序／小説断逢奇縁序／松石山房印牘序／神宮提要序／明清八家文読本叙／黎翁文稿叙／法眼居印賞附録自序／松浦羽洲詩集叙／伏水桃山碑／伏水桃山碑記／徳山七士碑／従一位伊達公紀功碑／故静岡県知事開口君功德碑／久保君彰徳碑／平山翁壽藏碑／劍客橘翁壽藏碑／陸軍歩兵一等卒廣瀬総平碑／白石柴門碑銘／天春文右衛門記念碑／良工市原氏墓碣銘／池田善平墓表／前田又吉祀堂記／小林藕塘伝／笠井透悟翁像讃／自題藏幅／題林子平画幅／題松陰先生書牘／後鳥羽神社藏帖跋／書林子平国字書牘後／外二篇

という目次があり、後半は代筆ではなく、依頼された寄稿と思われるが、前半は代筆のものである。「松石山房」は、郷純造の編纂で刊行された『松石山房印譜』（隨意莊、一八九八年）などの序文を代筆したものである。大蔵次官を一八九八年に退官し、浪人していた郷が、集めていた漢籍の印を集めて出版したものである。「別巻第一」にあった「隨意莊」は郷の別荘名であり、郷はいくつも錦山に代作を依頼していた。右の目次に傍線を引いたものが郷の依頼と思われるものである。

その中で柳原前光の代作と記されている一点、「万国通史學要序」を検討しよう。

嘉永年間仙台斎藤竹堂著蕃史、當時交通未開文獻頗乏。然使邦人通西史梗概。不可謂非竹堂之賜今也青森工藤助作。編纂万国通史嚮要。來請余序余受而閱之。掲我帝号紀元以紀之。起筆花旗建国。是為蕃史統編可也。唯至其傍搜博引則比諸蕃史。有過無不及矣。抑泰西編年史成于我邦者前後皆屬藤氏而同為東奥人不亦奇乎。姑書為序。

#### 序

嘉永年間仙台斎藤竹堂著蕃史、當時交通未開文獻頗乏。然使邦人通西史梗概。不可謂非竹堂之賜今也青森工藤助作。編纂万国通史嚮要。來請余序余受而閱之。掲我帝号紀元以紀之。起筆花旗建国。是為蕃史統編可也。唯至其傍搜博引則比諸蕃史。有過無不及矣。抑泰西編年史成于我邦者前後皆屬藤氏而同為東奥人不亦奇乎。姑書為序。

明治廿一年二月念五日

伯爵 柳原前光撰併書（印）

先の例と同じく、下段が刊行物（工藤助作『万国通史嚮要』秋雨軒（横浜區）、一八八八年五月）からの引用である。この例では、錦山の原文と全く同じものが「柳原公序」として同書の巻頭（山田頌義の「題辭」揮毫に続いて）を飾っている。

こうした添削、改作というものが漢詩の結社では一般的なのだろうか。森槐南の追悼記事で、末松兼澄は、伊藤の「詩作を見る」という柔らかな表現にしていたが、伊藤の作詩を点検する役目を槐南が果たしていたとはつきり

述べている。原作と発表作とが対比できる史料も少ないと思われ、その意味でも矢土錦山の遺した史料は貴重である。

### むすびにかえて

完全な調査を終えていないが、「矢土錦山文書」とも言うべき珍しい史料に立ち会うことができたのでその報告を行った。江戸時代の儒学受容は、武士や庄屋層などに大きな影響を与えた。廃藩置県の際、西郷隆盛は鹿児島に桂に対しての手紙で、「郡県制」と記したのみで詳しい説明を書いていない。それはこの熟語だけで、秦の始皇帝の郡県制、中央集権体制であることがわかるからである。それは儒学理解の前提としての中国史に関する知識を共有しているからに他ならない。各内閣に実力のある漢詩人が下級官僚として組み込まれるのは、そうした漢学文化がまだ生きていることを示している。

「逆流のなかに骨太に生きた自信あふれる男たちの物語」(帯の惹句)として村山吉廣『漢学者はいかに生きたか―近代日本と漢学』(大修館書店)が刊行され、明治の漢学・漢詩の世界を紹介したのは一九九九年だったが、幕末の漢詩を本格的に取り上げた、林田慎之助『幕末維新の漢詩―志士たちの人生を読む』(筑摩書房、二〇一四年七月)という書物が公刊されたのは二年前にすぎない。漢詩や漢学への関心はこのように低い。幕末の志士たちの詠んだ和歌が、十五年戦争下での国威顕彰にもてはやされたが、これらの漢詩・漢文文化を理解しなければその真情はわからない。そのことを「矢土錦山文書」は気づかせてくれる。もう少し努力を続けたい。

【付記】本稿は、二〇一一年度佛教大学特別研究費の助成を受けて行った調査に基づいて作成した。

註

- (1) 伊藤博文述・小松緑編『伊藤公直話』(千倉書房、一九三六年七月)
- (2) 原文はカタカナ交じりのため平仮名交じりに変更し、全体に句読点を付している。
- (3) 『勅奏任官職員録 明治九年三月 〃十一月』(出版社不明、一八七六年)
- (4) 『勅奏任官職員録 明治十年五月改正』(出版社不明、一八七七年)
- (5) 佐々木隆『伊藤博文の情報戦略―藩閥政治家たちの攻防』(中公新書、一九九九年七月)
- (6) 松村敏『松方デフレ期東京の中小両替商―中村両替店の資料分析』(『商経論叢』第四八巻三号、神奈川大学、二〇一三年三月)
- (7) 「高島九峯」の項、近代人物研究会編『近代人物／号筆名辞典』(柏書房、一九七九年一〇月)
- (8) 土井通予『仙寿山房詩文抄』巻四(浜田活三、一九一六年)
- (9) 学軒の著書二冊は、国会図書館の蔵書検索で見つかった。
- (10) 近江士族で、慶応四年から新政府官僚となっている。元老院議員ののち貴族院議員(『日本人名大事典』平凡社、一九三七年)
- (11) 祖父江町教育会編『祖父江町誌』(日昇堂書店、一九三二年三月)六八八頁
- (12) 広島藩儒坂井虎山に師事したのち、津藩の斎藤拙堂と土井贅牙に学んでいるので、錦山と同門になり、その縁だろう(『日本人名大辞典』平凡社、一九三七年)。
- (13) 維新後、東京に住み、杉聴雨、巖谷一六らと麴坊吟社を興し、詩作を続けた(同右)。
- (14) 幼名は小資で、太平天国に上書したのが清朝の手に入り、香港に亡命。この時から王韜と改名した。紫詮は号である。改名後、香港で翻訳した『火器説略』『普法戦紀』は日本にも紹介され、広く読まれたという(『アジア歴史辞典』平凡社、一九五九年。李盛平編『中国近現代人名大辞典』中国国際広播出版社、一九八九年)。
- (15) 服部担風著、一九〇八年刊。